

小学校音楽科において創造性を高める 学習指導に関する研究

—創作活動での表現形態の工夫をとおして—

花巻市立太田小学校 教諭 高橋 郁子

I 研究目的

小学校学習指導要領音楽の内容の取扱いでは、小学校高学年において「A表現の指導に当たっては、学校や児童の実態等に応じて、表現形態を選んで学習できるようにすること」と示されている。高学年になると音楽的な嗜好が明確になり、児童は自分なりの表現活動に対する思いや願いをもち、興味ある活動を一層深めたいという気持ちも高まる。そのようなことからイメージを膨らませて、自己を豊かに表現できる創作活動では、学校の実情や児童の興味・関心などを考慮しつつ、児童が表現形態を選択し、より豊かな音楽表現を求めるようにしていくことが大切である。

しかし一斉指導の中では、全体的な指導が中心となり、一人一人の思いや願いにそった授業が展開されにくい傾向がある。また、周囲の意見を受け入れるだけで自分の表現を考えなかったり、自分のイメージに合った表現ができずに、ただ楽器を鳴らしたりする児童も見受けられる。それは、一人一人の興味・関心を生かす指導よりも、活動の内容を教師が決めることの方が多く、児童に音楽をつくる目的や方法を理解させることが十分ではないまま、創作指導を行っていることによると思われる。

このような状況を改善していくためには、創作活動のねらいを明確にし、児童の思いや願いに基づいた活動を展開することが大切である。そして、個々に選択したさまざまな表現形態を生かし、その成果を共有し合う場をもち、互いの表現のよさに気づき、認め合いながら自己表現の幅を広げることが必要である。

そこで、この研究は、創作活動での表現形態の工夫をとおして、小学校音楽科における創造性を高める学習指導について明らかにし、今後の小学校音楽科の指導の充実に役立てようとするものである。

II 研究仮説

小学校音楽科の学習指導において、創作活動で次のような表現形態の工夫を取り入れた活動を行えば、児童は主体的に学び、より豊かな音楽表現を求めて創造性を高めることができるであろう。

- 1 明確なねらいをもち、自分のイメージに合った表現形態を選択する活動
- 2 個々に選択した表現形態の成果を共有する学び合う活動

III 研究の内容と方法

1 研究の内容

- (1) 小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する基本構想の立案

- (2) 手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察
- (3) 創作活動での表現形態の工夫を取り入れた手だての試案の作成
- (4) 授業実践及び実践結果の分析と考察
- (5) 小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する研究のまとめ

2 研究の方法

- (1) 文献法 (2) 質問紙法 (3) 観察法 (4) 授業実践

3 授業実践の対象

花巻市立太田小学校 第5学年（男子18名 女子19名 計37名）

IV 研究結果の分析と考察

1 小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する基本構想

- (1) 小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する基本的な考え方

ア 音楽の授業における創造性

「創造性」とは、新しい状況に出会ったとき、これまでに身に付けた知識や経験を十分に活用して、新しい解決をする能力ととらえた。音楽における創造性は、音や音楽のよさや美しさを感じ取り、イメージを膨らませ、自分の考えを入れたり、工夫したりすることによって、新しい形につくり直す活動の過程で培われる。児童がさまざまな経験を経て培ってきた感性的側面（雰囲気・曲想・豊かさ・美しさ）を感じ取ることと、構造的側面（リズム・旋律・強弱・速度・音色・和音や和声など）を知覚することとをかわり合わせ、気づき考えながら新しい組み合わせをしていく再構成の行為によってはぐくまれるのである。それが既存の作品を対象として行われる活動であっても、あるいは新しい作品をつくり出す活動であっても、一人一人が意欲的に自分にとって価値ある新しいものをつくり出すという行為が創造性の根底をなしていると考えられる。

【表1】創造性を高める力の構成要素と意味

構成要素	意味
かかわろうとする意欲	音楽活動を積極的に進めようとする意識
気づき考える力	感性的側面と構造的側面とに働きかけ、イメージしたことを考え深める力
構成して表す力	作り上げたイメージを声や楽器・身体表現で表す力

そこで、本研究では、【表1】のように創造性を「かかわろうとする意欲」「気づき考える力」「構成して表す力」の三つの要素からとらえた。

「気づき考える力」は、音や音楽のよさや美しさを感じ取って、気付いたことを考え深める一連のものであり、内的にイメージをしていく一つの力である。それに対して、作り上げたイメージを外的に声や楽器・身体表現で表す力が「構成して表す力」、これら二つの力を支えているものが「かかわろうとする意欲」である。

これらの構成要素は、児童自らが意欲的に音楽をつくり出そうとする活動を設定し、自己表現活動をより活性化させることにより、培われていくものであると考える。本研究では、自分のイメージに合った表現を進んで考え、互いの表現のよさや工夫に気づき、自己表現の幅を広げ豊かな音楽表現を求めようとする児童の状態を創造性が高まった姿ととらえる。

イ 小学校の音楽の授業において創造性を高めることの意義

全学年を通じて、児童が音楽活動への関心・意欲を高め、自分自身の音楽表現を求めて楽しい学習活動を活発に行っていくことを音楽科では目指している。特に高学年では、創造的に音楽にかかわることが目標の中にも掲げられ、創造的に音楽活動に取り組むことができるように、教師が授業を展開

することが求められている。

音楽の場合、創造的表現には技能が伴い、技能を身に付けていなければ心にあるものを形に表すことはできない。リズムや音程などの音楽の基礎技能の習得や、音楽的諸要素を吟味できる感覚は、創造的表現のために欠くことができない条件である。この条件を満たすために大きな役割を果たすのが創造性の高まりである。

「こんな表現をしてみたい」「こんな音楽にしたい」という児童の思いや願いがかなうような指導を受けたとき、児童は成就感に満ち、積極的に音楽とかかわろうとすると考える。一人一人のよさや可能性がさまざまな活動を通して発揮されるとき、自己実現が可能となり、興味や関心・意欲が喚起されるのである。このような活動の過程では、気付き考える力と構成して表す力が作用し合い、表現の幅が広がり、豊かに表現できる技能が身に付き、音楽活動の基礎的な能力の育成ができるととらえる。この力こそが、音楽の楽しさやすばらしさを十分に感じ取って、生涯音楽を愛好し続けながら、音楽のある生活を楽しむための基礎になると考える。

また、いろいろな表現の可能性を探り、音や音楽を再構成し高めていく活動では、児童が自ら考え判断し、自己を表現し、更に互いの表現を分かち合っていくことが可能である。このような内発的な学習意欲や、主体的態度に支えられた自主的・自立的な音楽活動を求め続ける心情、多面的に考える力こそ、人間が心豊かに生きていく根元的な力となるものである。

(2) 創作活動での表現形態の工夫を図る必要性

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）」（平成10年7月）では、「高学年においては、合唱や合奏などの表現形態を学校や児童の実態等に応じて選択できるよう配慮する（抜粋）」と述べられている。それは高学年の児童が、「生きる力」を確実に身に付けるためには、音楽活動の基礎的な能力を単なる知識や技能として身に付けるのではなく、それらを生かして、自分の思いや願いを実現する活動を積み重ねることが大切であるということの意味している。

創作活動では、児童が音や音楽を対象に自分の発想を試みたり、組み立てたり、積み上げたりしながら音楽作りができ、イメージを膨らませ、自己を豊かに表現することが可能である。そこで、創作活動のねらいを明確にし、児童の思いや願いに基づいた活動を展開することが必要であると考え。自らがその表現形態を選択し、創意工夫を深めながら、生き生きと表現できるような体験的な活動の場を設け、音楽的な深まりのある活動が可能になるような支援を行う。また、個々に選択したさまざまな表現形態を生かし、その成果を共有し合う場をもち、互いの表現のよさに気付き、認め合いながら学び合うことにより、自己表現の幅を広げることができると考える。

(3) 創作活動での表現形態の工夫を取り入れた実践についての指導の展開

創作活動での表現形態の工夫を取り入れた実践を行うため、指導の展開を次の「目標の明確化」の段階、「表現の工夫（表現形態の選択）」の段階、「表現を深める・楽しむ（学び合い）」段階の三つの段階として位置付ける。

ア 目標の明確化

これまでの創作における音楽の授業では、「活動あって学習なし」「活動あって音楽なし」といった音遊びの活動の形で終わっているものが多かった。それは、この題材で何を学ばせ、何を指導するかといったしっかりしたとらえがないまま、授業を行ってきたからであると思われる。

目標を明確にすることにより、音楽のよさや楽しさが分かり、児童は興味・関心をもって「歌ってみたい」「演奏してみたい」などの思いや願いをもつことができると考える。

イ 表現形態の選択

表現形態を選択して学習するという活動は、今までの音楽の授業の中では、ほとんど行われていなかった活動である。この活動を分かりやすくいえば、授業を進める中で、学習のねらいを実現するために歌唱の活動をするか、それとも器楽の活動するか、または身体表現の活動するかを、児童自身で選択するということなのである。歌唱の中でも、独唱、斉唱、合唱などと細分化され、表現方法はかなり広がる。

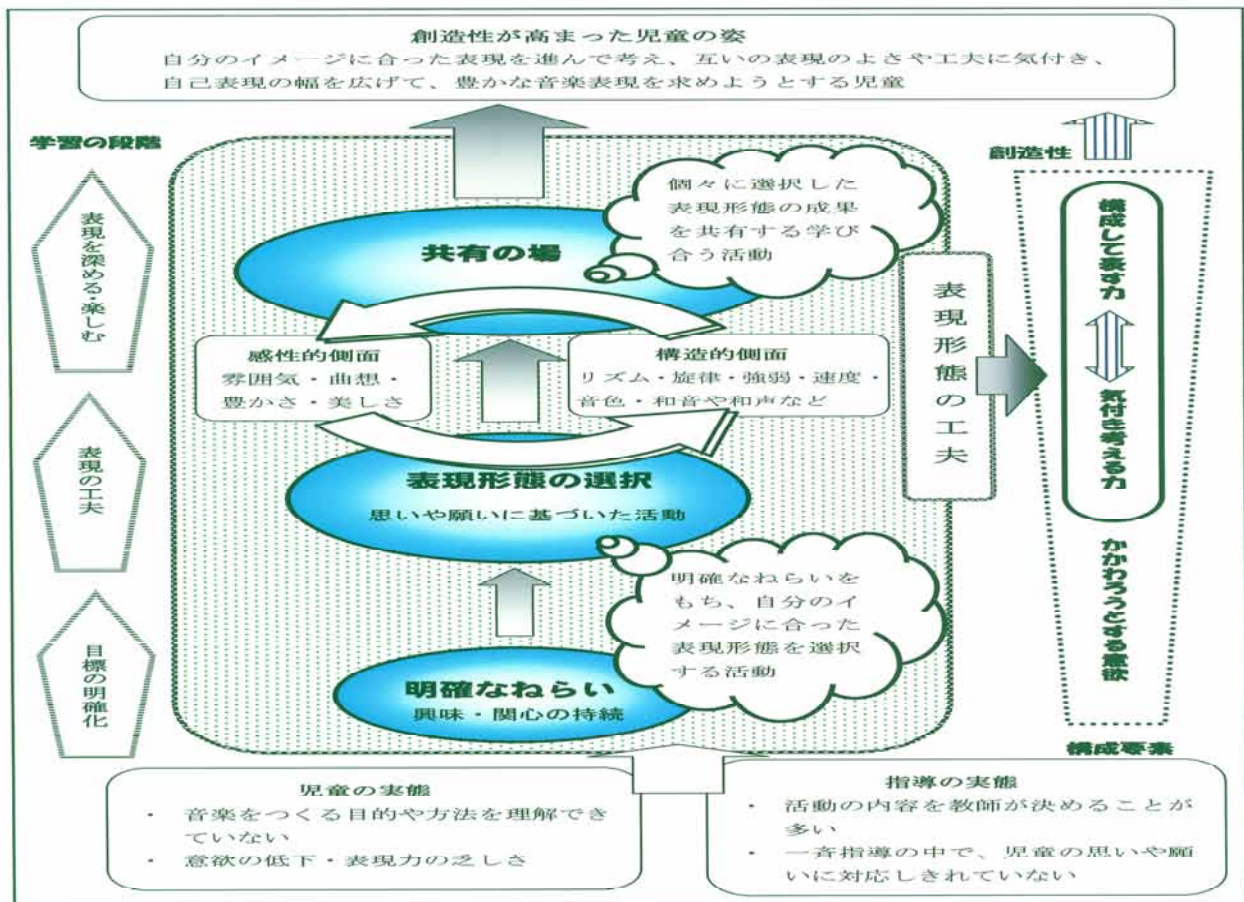
表現の工夫の過程で児童は、思い描いたイメージの実現を目指し、個々の課題をもった表現の工夫を行うと考えられる。自分の思いや願いに基づく活動であるだけに、イメージとモチベーションが喚起され、感性的側面と構造的側面が相互に関連しながら、主体的に表現しようとする「表現する力」につながっていくととらえる。構造的側面を吟味したこの「表現する力」こそが、技能面を重視した表現する力だけでなく、自らの能力を最大限に生かした「表現の工夫」でもある。

ウ 学び合う場の設定

学習過程がどのような問題解決学習、体験学習であったとしても、最初からやり方を教えられ、結論を教えられているような学習であっては、創造性は高まらない。友達の表現のよさに気づき、互いによさを認め合うことにより、自信がつき、音楽を愛好する態度が育つと考える。また、よさに気付いて自分の表現の工夫をすることが自己表現の幅を広げることに他ならない。その意味からも、表現を共有する場の設定が必要であると考えられる。

(4) 小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する基本構想図

これらの基本的な考えに基づき、小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する基本構想図を【図1】のように作成した。



【図1】小学校音楽科において創造性を高める学習指導に関する基本構想図

2 手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察

- (1) 実態調査のねらいと内容（本資料においては省略する）
- (2) 調査結果の分析と考察（本資料においては省略する）
- (3) 実態調査の結果から明らかになったことと手だての試案作成上の留意点

調査から明らかになったことと手だての試案作成上の留意点を【表2】に示す。

【表2】実態調査の結果から明らかになったことと手だての試案作成上の留意点（要因分析は省略）

明らかなったこと	手だての試案作成上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・他の人や他のグループの演奏は聴きたいのに対して自分の演奏を聴かせることに苦手意識をもっている児童が多い ・学び合いの場面で話すことに消極的である ・自分の表現や演奏がうまくできたときやほめられたときに表現の高まりを感じている 	<ul style="list-style-type: none"> ・人前で演奏することへの抵抗感を取り除くような授業形態や雰囲気作りを努める ・他の人の演奏と自分の演奏とを比べて、他の人のよさに学ぶことができるように学習シートで自分の演奏との比較を記入するなどの指導方法を工夫する ・全員の前で話す機会を増やしたり、学習シートに記入したりして整理をして話せるようにする ・練習の方法や進め方についての打ち合わせを十分に行い、満足できる活動になるように練習の時間を確保したり、友達の演奏のよさに気付いたりできるような鑑賞の視点を与え、支援を行う

3 創作活動での表現形態の工夫を取り入れた手だての試案の作成

- (1) 手だての試案の作成

基本構想及び実態調査の分析から明らかになった学習の状況を振り返り、「自分のイメージに合った表現形態を選択する活動」「表現形態の成果を共有する学び合う活動」を取り入れたものが【表3】である。

- (2) 検証計画及び調査計画

創造性の高まり状況をみるための検証計画「表現形態の工夫」を取り入れた学習についての手だての試案の妥当性をみるために、【表4】のような検証計画により、分析と考察を行う。また、授業で活用した学習シートは、記述内容を【表5】【表6】の判断基準によって分析し、考察する。

【表3】創作活動での表現形態の工夫を取り入れた手だての試案

目標の明確化	表現の工夫	表現を深める・楽しむ	表現形態の工夫	指導上の留意点
<ol style="list-style-type: none"> 1 学習課題を設定する 2 題材全体の学習計画を見通す 3 提示してある数種類の表現形態を聴いたり、実際にやってみたりして、自分のイメージに合う表現形態を選択する ・旋律やリズム、振り付けを創作する場合のねらいを再確認する 	<ol style="list-style-type: none"> 4 グループに分かれてねらいを確認しながら創作活動を進める ・ねらいを確認しながら、音楽的諸要素を組み合わせながら、思い描いたイメージの実現を目指す <p style="text-align: center;">自分のイメージに合った表現形態を選択する活動</p>	<ol style="list-style-type: none"> 5 グループごとに発表し合う ・表現の深まりがあるか、他の表現に学んだことを取り入れているかについてなど、それぞれの観点で話し合う <p style="text-align: center;">表現形態の成果を共有する学び合う活動</p>	<ol style="list-style-type: none"> ① ねらいをしつかりとつかみ、自分のイメージに合う表現形態を選択する グループ分け 日本の音階で創作(レ・ミ・ファ・ド) リズム 拍子の拍を正確に刻む 身体表現 拍子の動きを体感 ② 彼のグループの工夫のよさや学んだ、自分たちの表現に取り入れられたりできるところを見付け合う ③ 他のグループからのアドバイスを参考にして表現を見直したり、付け加えたりしながら繰り返し 	<ul style="list-style-type: none"> ・各曲の特徴について、あらかじめ簡単に学習シートにメモを取って、発表するときに抵抗感をなくすように配慮する ・グループごとに音やリズム、身体表現を考える ・個々に選択した表現がねらいからはずれていないか、学習シートに記入して確認する ・実態調査で明らかになった他の人の演奏を聴きたい反面、自分の演奏を聴かせるのは苦手という意識の改善を図るため、二つのグループでお互いに発表し合う ・事前の意向調査を基にグループのだいたい的人数を決める ・発表することに苦手意識を感じている児童が少なくないうで、円形になって発表し合い緊張をほぐす ・演奏のよさに気付くような鑑賞の視点を与えたり、発表の抵抗をなくすために学習シートに記入したりししながら発表会を全体のものにする ・全体をとおしてビデオに録画し、それぞれの高まりを感じながら鑑賞し合う

また、授業で活用した学習シートは、記述内容を【表5】【表6】の判断基準によって分析し、考察する。

【表4】検証計画の概要

検証項目	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
学習に関する意識の変容状況	① かかわろうとする意欲	事前・事後に実施する質問紙による多肢選択	χ^2 検定（変化の検定）により分析し、考察する
創造性の育成状況	① 気付き考える力 ② 構成して表す力	各段階における児童の活動の様子や学習シートの記述 各段階（第5時と第7時）における児童の学習シートの記述 学習活動過程における児童の活動の様子	判断基準（【表5】）を用いて、各段階の状況を分析し、考察する 判断基準（【表6】）を用いて、おはやしづくりの状況を分析し、考察する ビデオに撮影しながら、観察法により、総合的に分析し、考察する

【表5】児童の学習シートへの記述内容及び学習活動の様子を判断する児童の状況例（抜粋）

要素 \ 基準	A	B
とかすかわる意欲	日本の歌や民謡に関心をもち、聴いたり歌ったり演奏を聴き、その音色やリズム・拍子及び奏法の特徴について、適切な考えを表現したり、挙手などにより適切な考えを意思表示したり、学習カードに構造的側面を考慮して記入したりしている	するとともに、表現の仕方を工夫したりしようとする 演奏を聴き、その音色やリズム・拍子及び奏法の特徴について、自分なりの考えを表現したり、挙手などにより自分の考えを意志表示したり、学習カードに記入したりしている （詳細については、9頁【表8】参照）

【資料2】「表現の工夫」段階、「表現を深める・楽しむ」段階での授業実践の概要

段階	時数	目標	主な活動	児童の反応や活動の様子	段階	時数	目標	主な活動	児童の反応や活動の様子																
表現の工夫	5・6	おはし	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ表現形態を生かして、おはしを完成させよう。 グループごとに自分のイメージに合う音やリズムを工夫したり、身体表現を考えたりする。 選んだ表現形態を生かして表現を工夫する。 リコーダーと和太鼓とチャップパグループ (5名) リコーダーと和太鼓と踊りと手ひらがねグループ (5名) リコーダー (またはピアノ) と和太鼓グループ (5名×2グループ) リコーダーと和太鼓と歌と踊りグループ (7名) リコーダーと和太鼓と手ひらがねグループ (5名) リコーダーと和太鼓とチャップパと手ひらがねグループ (5名) 		表現を深める・楽しむ	7・8	おはし	<ul style="list-style-type: none"> 太田祭りはおはしの発表会をしよう。 グループごとにおはしの練習をする。 発表会をする。(学習シートを基にグループの表現を工夫した点について説明) 	<ul style="list-style-type: none"> 発表し合う活動 共有し合う活動 (学び合い) 																
			 <p>ドッコ ドッコ ドン カカ でいいかな?</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のパートを練習する。 グループで合わせて表現を工夫する。 形態の似ているグループ内で発表会をする。   <p><表現を工夫する学習シート></p>  <ul style="list-style-type: none"> 本時の活動を振り返り、学習シートに記入する。 <分かったこと・感じたこと> リズムを考える人が、一人だけだったのでむずかしかったけど、一段できてよかった。 楽譜をかくのが分からなかったので、レやさというように音でかいた。楽譜をかくのは、大変だなと思った。 どりあえず、パートが完成してよかった。はやくうまくなりたい。 自分で自分だけのリズムをつくって楽しかった。 	 <p>互いの表現のよさや工夫に気付く</p>  <p>共有し合う活動 (学び合い)</p> <p><学び合いでの学習シート></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>グループ</th> <th>発表</th> <th>共有</th> <th>学び</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>グループ1</td> <td>リズムが良かった</td> <td>歌が良かった</td> <td>リズムが良かった</td> </tr> <tr> <td>グループ2</td> <td>リズムが良かった</td> <td>歌が良かった</td> <td>リズムが良かった</td> </tr> <tr> <td>グループ3</td> <td>リズムが良かった</td> <td>歌が良かった</td> <td>リズムが良かった</td> </tr> <tr> <td>グループ4</td> <td>リズムが良かった</td> <td>歌が良かった</td> <td>リズムが良かった</td> </tr> <tr> <td>グループ5</td> <td>リズムが良かった</td> <td>歌が良かった</td> <td>リズムが良かった</td> </tr> </tbody> </table> <p>深め合う活動</p>  <p>グループの表現を再考する</p> <ul style="list-style-type: none"> 学んだことを基に、それぞれの作品をもう一度練り直す。 グループごとに練習をする。 <p><学び合いでの学習シート></p>  <p>「2003太田5年祭りおはし」を味わおう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「2003太田5年祭りおはし」としてビデオに録画する。 活動を振り返り、学習シートに記入する。 <分かったこと・感じたこと> 中間発表会で強弱がはっきりしていなかった班が、リコーダーやたいこで強弱がついて盛り上がり分かるようになっていたのよかったです。 かけ声をつける班があえて、とてもお祭りのふんい気が出ている。 リコーダーのパートが最後には歌をいっしょに歌っていたのでびっくりしたけれども、にぎやかな感じが出ていたと思う。 				グループ	発表	共有	学び	グループ1	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった	グループ2	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった	グループ3	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった	グループ4	リズムが良かった
グループ	発表	共有	学び																						
グループ1	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった																						
グループ2	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった																						
グループ3	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった																						
グループ4	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった																						
グループ5	リズムが良かった	歌が良かった	リズムが良かった																						

(2) 実践結果の分析と考察

ア 小学校音楽科において創造性を高める学習指導についての構成要素の育成状況

手だての試案に基づく授業実践によって、音楽科の授業における創造性を高めるための三つの構成要素がどのように育成されたかを5頁【表4】【表5】、6頁【表6】の検証計画に基づいて分析し、検証する。

(ア) かかわろうとする意欲の育成状況

次頁【表7】は、音楽科の授業におけるかかわろうとする意欲の変容状況について χ^2 検定の結果により表したものである。有意差が、設問1、3、7、8で認められた。事前調査では、設問1に対してマイナス反応が多かったが、「目標の明確化」段階で、この題材では何をどのようにつくってあげばよいのかが明らかになったことにより、児童の意欲を高めたと考えられる。また、設問3については、児童の思いや願いを生かして、自分の表現したい方法を選択して活動を進めたため、意欲を喚起し、児童の期待感を高めたものと思われる。児童が選択する学習では、教師は支援者という立場に

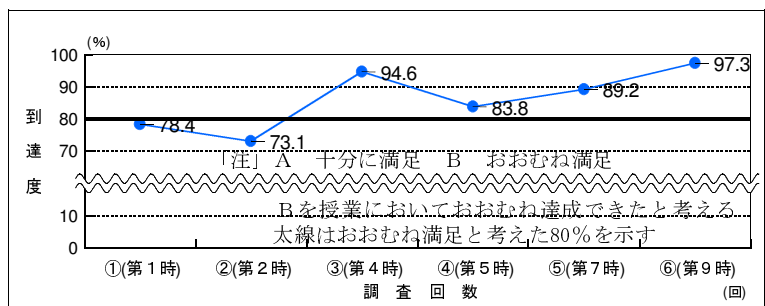
立ち、授業の中で児童が、自分で考え判断して進める積極的な学習が可能となり、進んで音楽にかかわろうとする意欲が向上すると考えられる。設問7、8についても、それぞれの表現形態で練習した成果を共有する学び合う活動を取り入れたことにより、互いの表現のよさに気付くことが容易であった。特に他のグループからほめられた表現の工夫は、そのグループで更に自信をもって活動する表現力につながり、また他のグループでも新しく取り入れてみるよい機会にもなった。他のグループの発表を聴き、学び合い、高め合うことによって「2003太田5年祭りばやし決定版」のビデオを鑑賞したときには、明らかに表現力の深まりがみられ、自分でつくり出す力がついたり、演奏がうまくなったりしているという満足感につながったと思われる。

有意差が認められなかった設問2、4、5、6については、事前調査の段階でプラスの反応を示した児童が、どれも30名以上（6については全員）であり以前から意識が高かったことがうかがえる。

設問2は、すべての段階における音楽活動に関わる意欲を調査したものである。今回はグループで表現の工夫を図る活動が多かったため、表現に自分なりの考えを入れて表現はしたものの、グループの発表の段階で全体的な流れに合わせたため、自分の考えを生かせなかったと判断した児童もみられた。

ただ設問2の変容状況についてみると、マイナス反応からプラス反応に変化した児童が7名であり、有意差はみられないものの、児童の意識は高まる傾向を示していると考えられる。

また、【図2】はかかわろうとする意欲を「目標の明確化」「表現の工夫」「表現を深める・楽しむ」の各段階に分けて調べるために、児童の活動の様子や学習シートの記述を基に、5頁【表5】の判断基準によって分類し、AとBの人数の合計の割合を表したものである。【図2】かかわろうとする意欲の育成状況



「目標の明確化」の段階である1、2時間目には、「おおむね達成」の80%を達成できなかった。しかし「表現の工夫」の段階や「表現を深める・楽しむ」段階では、80%を超えていることから、かかわろうとする意欲は、時間を経るごとに高まっていったと考えられる。特に、個々の思いや願いを生かして表現方法を選択する活動では意欲が高まり、ほとんど全員が自分の意志で表現したい方法を第3希望まで選択することができた。それは、最初の段階で目標を明確にしたことにより、「歌ってみたい」「演奏してみたい」といった意欲が、少しずつ高まり、自分の思い描いたイメージの実現を目指し、意欲的な活動に結び付いたと考えられる。その選択した方法を基にして、さまざまな表現形態のグループを編成し、創作活動を行って発表し合い、学び合うことによって表現方法が分かり、更に

【表7】かかわろうとする意欲の変容状況

調査内容	事後			χ ² の値
	事前	+	-	
1 「つくって表現」の授業がくるとき、あなたはどんな気持ちになりますか	+	21	0	13.00 *
	-	13	3	
	合計	34	3	
2 「つくって表現」の音楽の活動で自分なりの考えをもって活動していますか	+	28	2	1.78
	-	7	0	
	合計	35	2	
3 あなたは、「つくって表現」の音楽の学習で、自分から進んで音楽にかかわっていますか	+	23	1	9.31 *
	-	12	1	
	合計	35	2	
4 あなたは、「つくって表現」の音楽の学習で、表現の仕方をいくつか考えますか	+	31	1	0.00
	-	2	3	
	合計	33	4	
5 音楽の授業中に、他の人の演奏を聴いて「〇〇〇をイメージしてつくったのかな。」とか、「工夫しているな。」ということを考えますか	+	32	2	0.00
	-	3	0	
	合計	35	2	
6 音楽の授業中に、他の人の演奏を聴いて「いい演奏だな。」とか「じょうずだな。」ということを考えますか	+	36	1	0.00
	-	0	0	
	合計	36	1	
7 音楽の授業中に、他の人の演奏を聴いて、その演奏のよいところを自分の演奏にも生かそうとしていますか	+	28	0	7.11 *
	-	9	0	
	合計	36	0	
8 「つくって表現」の音楽の学習で、自分のつくり出す力がついたり、演奏がうまくなっていると感じますか	+	25	0	11.00 *
	-	11	1	
	合計	36	1	

【注】1 事前調査は8月27日、事後調査は9月18日に実施したものである
2 各調査内容の意識をアイウエの四肢選択で行ったものである
ア・イは、プラス反応であり、アはイより強い反応である
またウ・エはマイナス反応であり、エはウより強い反応である
3 *は有意水準5%で有意差が認められたことを示す
4 χ²検定に用いた公式は次に示す通りである

$$b+c > 10 \text{ のとき、 } \chi^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c}$$

$$b+c \leq 10 \text{ のとき、 } \chi^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c} \quad (\text{イェーツの修正式})$$

主体的に表現しようとすることでかかわろうとする意欲を高めることができたと思われる。

【表8】は、第1時、第2時、第5時、第9時でのかかわろうとする意欲を判断する学習シートの記述及び行動例である。最初のうちは、漠然と「きれいな曲だった」や「おもしろかった」のように、全体的な印象を述べたり記述したりする児童が多かった。しかし、学習を進めるに従って特徴をとらえ、その特徴からどのような感じがするかを具体的に構造的側面からも考えたり、何故そのように感じるのかを感性的側面から分析することができるようになった。

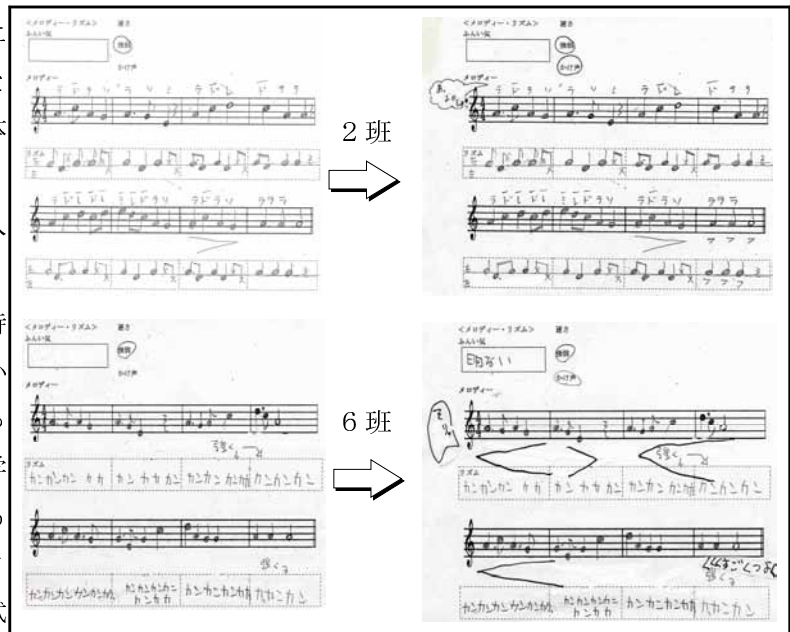
【表8】かかわろうとする意欲を判断する学習シートの記述及び行動例

	Aと判断した記述・行動例	Bと判断した記述・行動例
第一時	<ul style="list-style-type: none"> 同じ子もり歌なのに、最初の子もり歌は明るい感じで、2曲目の子もり歌は暗い感じがした 1曲目と2曲目では、音の高さが違う感じがして、2曲目の方が低い 	<ul style="list-style-type: none"> 似ていたけど、歌い方とか音の感じが違っていた 音程の高い方と低い方の2種類あった 歌は、どちらも同じなのに雰囲気違っていた
第二時	<ul style="list-style-type: none"> リズムが速くて、明るくて元気な曲だった 言葉が全然分からなかったけれど、歌詞とかリズムとかが沖縄の音楽みたいな気がした 三味線やたいこのような楽器が使われていて、かけ声もあって聴いていてとても元気になる曲だった 	<ul style="list-style-type: none"> 明るい感じがして、おどりたくなるような曲だ 沖縄のような感じがする曲だった 速くてすごい曲だった 明るい曲で、おもしろい曲だと思った。楽器も使われている
第五時	<ul style="list-style-type: none"> リズムや旋律を感じながら、強弱などに視点を当て、さらに豊かな表現を求めて意見を出しながら最後まで練習しようとしている 	<ul style="list-style-type: none"> リズムや旋律を感じながら最後まで練習しようとしている
第九時	<ul style="list-style-type: none"> 最初は強弱を付けたつもりでも、強弱の違いが分からなかったけれど、弱いところも入れたら強弱がはっきりして、最後が明るい感じになった かけ声が付いたら、とっても祭りの感じが出て元気な演奏になった 全体のバランスを考えて、手びらがねやメロディーが聞こえるようにたいこをたたいたら、みんなの音が聞こえるようになったと思う 	<ul style="list-style-type: none"> 最初の発表会では、強弱の意味がなかったけれど、2回目は強弱の効果があってよかった 2回目の演奏の方がおはやししくなった みんなの音が聞こえるようになってよかった

(イ) 気付き考える力の育成状況

【資料3】は、気付き考える力が、【資料3】気付き考える力の変容状況

学び合いの前後でどのように変容したかを表したものである。学び合うことにより、構造的側面についてより具体的に考えることができるようになり、強弱などについてもどのように取り入れていけばよいかをグループで考え、表現に深みが増した。例えば、第5時の学習シートでは、6班のように1小節のみを選択して強く演奏するといった表現を心がけていたグループが、学び合い後の第7時では、強く演奏する部分を引き出すために、前もってデクレシェンドを入れて演奏するなどの試みが行われた。これは、学び合いの中で「強くしているところが伝わってこない」という意見が出されたことによる表現の工夫であり、表現の深まりでもある。また、祭りばやしにおはやしらしさを表現するため、かけ声を入れて創作し直すなど、感性的側面においても変容が見られた。



(ウ) 構成して表す力の育成状況

ビデオに撮影しながら、構成して表す力の変容状況をとらえた。次頁【表9】は、各班ごとの構成して表す力を学習シートとビデオの撮影記録を基に分析したものである。どの班も表現に深まりが見られ、自分たちの表現の意図をどのようにして鑑賞する側に伝えるか、その方法が学び合いの前の段

階よりも明確になっていると考えられる。

以上のことから、構成要素の三つの力はおおむね育成されていると考える。

5 小学校音楽科において創造性

を高める学習指導に関する研究のまとめ

これまで、手だての試案に基づく授業実践を行い、実践結果の分析と考察をとおして、その妥当性について検討してきた。その結果から、小学校音楽科の授業において創造性を高める学習指導の成果と課題についてまとめる。

(1) 成果

- ア 児童の思いや願いに基づいて表現方法を選択させるなど、明確なねらいの下、表現形態を工夫したことによって、生き生きと音楽活動にかかわらせ学習意欲を高めることができた。
- イ 実態調査を基に、個々の学習状況を考慮し、発言をしやすい環境作りに努めた結果、学習活動がより活発になり、学び合いが「互いに学べる場」として創造的な思考を促した。
- ウ 発想や表現のよさを発言や中間発表会で、児童が互いに認め合い、学習シートなどで振り返ることで互いの表現のよさが分かり、自信をもって新たな発想や考えが生まれた。

(2) 課題

「気付き考える力」を「構成して表す力」にスムーズに移行できるような指導の工夫を行う。

以上のことから、小学校音楽科において、創作活動での表現形態の工夫を取り入れた手だての試案は妥当であり、創造性を高める上で効果があったという見通しをもつことができた。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究は、創作活動での表現形態の工夫を取り入れることにより、小学校音楽科において創造性を高める学習指導について明らかにし、小学校音楽科の学習指導の充実に役立てようとするものであった。その結果をかかわろうとする意欲、気付き考える力、構成して表す力の三つの育成状況について分析と考察を加えることにより、仮説の有効性の検討に当たってきた。その結果、創作活動での表現形態の工夫を取り入れた学習指導は、小学校音楽科において創造性を高める上で有効であることが確かめられた。

2 今後の課題

- (1) 表現形態の工夫を取り入れた学習指導を高学年のどの題材で行うことによって、児童の創造性をより高めることができるのか、授業実践をとおして確かめる。
- (2) 授業内容を厳選することが求められている音楽科の授業において、バランスよく内容を配列して、生き生きと児童が活動し、創造性を高める指導の在り方を実践をとおして明らかにする。

【参考文献】

金本正武著 「音楽科授業論」 東洋館出版社 1998年

峯岸創監修・編著 「日本の伝統文化を生かした音楽の指導」 暁教育図書株式会社 2002年

【表9】構成して表す力の変容状況

班	表現形態	「表現を深める・楽しむ(学び合い)」段階での変容状況
1班	リコーダーと和太鼓とチャップ	・「どっこいしょ」というかけ声加わり、リズムと旋律がそろっている ・強弱がより明確 ・速きを変えようとしているが難しい状況
2班	リコーダーと和太鼓と踊りと手びらがね	・「あっ、よいしょ」「よいしょ」というかけ声加わり、明るくにぎやかな曲に変化 ・アクセント加わる
3班	リコーダーと和太鼓(ピアノ)	・「そりゃ」というかけ声加わる ・ピアノとリコーダーの旋律が以前よりもそろっている
4班	リコーダーと和太鼓	・「そりゃ」というかけ声加わり、強弱も明確
5班	リコーダーと和太鼓と歌と踊り	・和太鼓の音に負けないようにマイクを使用したため、歌がよく聞こえる ・「5年生、すごい」の「すごい」を盛り上げるため、リコーダーも歌に参加
6班	リコーダーと和太鼓と手びらがね	・「あっ、よいしょ!」というかけ声加わる ・強弱を付けるためにクレシェンド、アクセントの表現加わる
7班	リコーダーと和太鼓とチャップと手びらがね	・メロディーが止まらないで演奏できる ・「そいやー」のかけ声を全員で言うことになり、前よりも元気な曲に変化 ・強弱を意識して、最後を盛り上げている